

動機論序説 (1).〔第二回〕

佐野健治

第1部（印刷稿）に見えるラスコーリニコフの 犯行の動機 [つづき]

1-10 ラスコーリニコフはセンナヤ広場から帰って、夢も見ずに長く眠った。翌日、つまり犯行当日の10時、ナスターシャにゆさぶり起こされるが、すぐまたソファーの上へ倒れた。午後2時、ナスターシャが入ってくると、彼は前と同じ姿で横になっていた。スープをわずかばかり食べた。「またソファーに身を横たえたが、もう眠ることはできず、枕に顔をうずめて、じっとうつぶせになった。眼の前に、たえず幻が現われた。それがみななんとも奇妙な幻だった。なかでも一番よく見たのは、自分がアフリカに、どこかエジプトあたりのオアシスにいる光景だった。キャラバンが憩い、駱駝がおとなしく寝そべっている。周囲には椰子が生い茂っている。みんな食事をしている。彼だけは、すぐそばをさらさらと流れる小川に口をつけて、たえず水を飲んでいる。あたりはそれは涼しくて、奇跡のように素晴らしい空色をした冷たい水は、色とりどりの小石や、金色に輝く清らかな砂のうえを走っていく……突然、時計の鳴る音がはっきり聞えた。彼はぎくりとしてわれに返り、頭をあげ、窓の外を見て、時間の見当をつけると、突然、すっかり正気に戻って、まるで誰かにソファーからもぎはなされてもしたように、飛び起きた」。

以上はセンナヤ広場での立ち聞きの後帰宅して、実際の犯行準備に取りかかるまでの約二十四時間の経過である。ドストエフスキーの叙述では、その間、

犯罪の実行にブレーキをかける結果になりうるような自問自答は、まったく行なわれず、代りに睡眠と幻覚が時間を満していた。このことは、「試験」のための老婆再訪以降のラスコーリニコフの行動の一部始終を微細にわたって知らされてきた読者＝観客にとって、すなわち、マルメラードフとの出会いと母の手紙へのあれほどの過熱ぎみの自己反応を知らされてきた私にとって、多分に肩すかしのあしらいと言わねばならない。そして作者ドストエフスキーはいよいよ老婆に斧を振り下す瞬間にいたるまでの経緯の叙述と平行して、語り手の側から、解説的に、犯行者の行為を支える論理を代弁する。けれどもそれは、必ずしもいま現在のラスコーリニコフの思考に即して、現在の行動と犯罪の論理との相関を解説するのではない。睡眠と幻覚との二十四時間を経て、そこから覚めて、出社を急ぐ社員の朝の身支度に似たラスコーリニコフの殺人準備と、またその行為とは直接結びつかないラスコーリニコフの思想的準備とを、この二つのことの相互交通にはあまり触れないようにして、ほとんど平行的に述べていく。そしてのちに見るとおり、第1部にはこの作品の全構想の枠組というべきものがすべて埋められていることと対応して、犯行の動機についての基本的な考えもまた、ここに用意されているように思われる。そのあらましを [I-6] 後半部から取り出す作業をここでしておこう。

斧を下げる輪っかの取り付けと擬装の質草の工作に次いで、ラスコーリニコフは斧を入手するために主婦の台所へ来て意外な事態に出会う——不在であることを予想していた当のナスターシャが、台所にいて、彼女はそこにいないと勝手に決めていたラスコーリニコフは、彼の初歩的な認識と実際との食い違いに、自からあきれ→打ちのめされ→侮辱を受けたような気がし→かつは自嘲し→鈍い、獣じみた憎悪の念が、心の中に沸きたちはじめた、という彼独自の感情の循環線をひとまわりする。が、予定外の斧を門番小屋から盗み出すことができ、「考えに窮すれば、悪魔が助けにきてくれる！」と、偶然によって元気づけられる。斧の入手をめぐる、これだけの行為と思考の短い一サイクルは、実は、ラスコーリニコフの現実認識の特徴、すなわち分裂と自己欺瞞を図

解して見せたものと言っていいだろう——無論、風刺画として。この風刺画に説明文を付けるように、ドストエフスキーの語り手は、ラスコーリニコフが犯行を決定するに至る思考の過程での観念を次のように解説する。

1-11 (1). a. ラスコーリニコフは段階的決定(複数)が最終的となるにつれて、それが醜悪、愚劣なものに見えてきた。(2). 心の中の苦闘を経てきてなお、自分の計画が実現するとは信じられなかった。(3). もし最後の一点まで検討しつくされ、最終的な決定を見て、もはやいかなる疑問の余地も残らなくなったとしても——その時でさえも、彼は一切を、愚劣で奇怪な不可能事として断念してしまったかも知れない(最終的な決定とは何なのか、レトリックとして)。(4). ところが解決のつかない点、疑問の点は山ほど残っていた。(5). a. (斧を無断借用して発覚したら、嫌疑を招くだろうとは感じているが) そんな瑣末事については考えず、b. 彼は主要なことだけを考えた。しかし、(6). a. いつかは考えることを止めて、あそこへ出かけて行くことになるとは、想像できなかった、b. こないだの試験訪問さえ、ちょっと試ただけで、真面目なものと言えなかった、c. それさえ耐え切れなくなって、自分自身に憤慨しながら逃げ出した。(7). a. 問題の道徳的解決という意味では彼の分析は終わるように思われた、b. 彼のカズイスタカ [決疑論 казуистика] は剃刀のようにとぎすまされ、自分の内部に意識的な反論を見いだすことができなかった、c. ところが、最後の最後となると、自分を信じることができず、奴隸的な態度で手さぐりで反論を探しまわった。(8). 最後の日は、思いがけず訪れて、すべてを一挙に決定してしまった、それは物理的な作用を及ぼし、彼は服の端を歯車にはさまれ、機械の中へ巻き込まれていくようだった。(9). a. ラスコーリニコフが出した結論によれば、犯罪がたやすく発覚する主要な原因は、犯罪を隠すことが物理的に不可能であるという点によりも、むしろ犯罪者自身の内部にある。b. 犯罪者は、犯行の瞬間に、意志と判断力の減退に見舞われ、子供じみた異常な軽率さに捉われる。c. この理性の昏迷と意志の減退は、あたかも病気のように人間を襲い、しだいに力を増し、犯罪遂行のしばらく前にクラ

イマックスに達し、d. そのままの形で犯行の瞬間にも、犯行後にも、しばらく続き、e. やがてあらゆる病気と同様に、しだいに消えていくものだ。(10). a. 病気が外ならぬ犯罪を生むのか、b. それとも、犯罪そのものが、その特殊な性質から、常に病気に類した何物かを伴うのか？——この問題は、ラスコーリニコフにはまだ解決する力がないように自覚された。(11). しかしながら、自分の場合には(9). のような現象は起こらない、すなわち、a. そうした病的な変化は起こりえず、b. 計画遂行の全期間を通じて、判断力と意志は決して奪われることはあるまい、c. それも理由はただ一つ、彼によってもくろまれている計画は「犯罪ではない」からだ、とラスコーリニコフは決めこんでしまった。こんなふうにドストエフスキーは、ラスコーリニコフの決定の回路を解説しておいて、言う、

「彼が最後の決定に到達するまでの全過程は省略することにしよう。それだけでなくともわれわれは、あまりにも先走りしすぎたのである……」と。

しかし、ドストエフスキーはなおも付け加える、(12). ラスコーリニコフにとっては、a. 純然たる物質的な困難は、彼の頭の中で概して全く二義的な役割しか果たさなかった、b. 彼にとっては『意志と判断さえしっかり保っていれば、そんなことは、自ずと克服されてしまうものだった』。(13). a. けれども、事はいっこうに始まらなかった。b. 相変わらず、彼には自分の最終的決定が何にもまして信じられなかった、c. そして、事が始まってみると、なりゆきはことごとく思っていたものと違い、意想外といってもよいものとなってしまった。語り手のレトリックは反転の連続である。

1-12 以上の解説（作者ドストエフスキーによる）を読んだだけでも、いくつかのことが浮びあがる。

これは、目的→カズイスタカ→具体策→選択肢→決定（決心）→実行というような、ある単一方向の、覚醒された水平上に描かれた方程式ではない。しか

しいま仮に、この式に沿ってちょっと考えてみても、これらの項目のうち明確に規定されるものは一つもない、とくに目的と具体策(手段)は最後まではっきりしない。その中でも、「なぜアリョーナ・イワーノヴナ殺しなのか」という、直接的な目的と手段を問う問題は、ラスコーリニコフ本人も、またラスコーリニコフと共棲する他のラスコーリニコフたちも、さらに小説の語り手も、そして実はドストエフスキー本人さえも、これに対して正面しない姿勢に終始するかのようだ。具体的な問題とは、(1). なぜアリョーナ・イワーノヴナが犠牲者として選ばれるのか。(2). なぜ強盗を働くのか、強奪した金は何のためか、利用するとすれば何に? これらの間は答えられずじまいである。ラスコーリニコフはソーニャへ告白しながら、殺害目的の説明では二転三転するが、なかでも金の利用という媒体の問題はラスコーリニコフはもちろんソーニャも関心を向けない。(この件は草稿の検討の項を参照)。

最終的決定 окончательные решения という用語は、複数形であり、何らかの検討(解決)→決定→また検討(解決)→決定→……という重複的な、というより次第に高度を稼いでいくジグザグ形の思考のパラダイムがその支持形式として背後にある。いわば最終的決定の最終的決定に、仮に、立ち至ったとしても、それはラスコーリニコフ自身にとって醜悪、愚劣、奇怪なものとして、また不可能なものとして立ち現われるだろう、という予感を彼は自分のどこかに持っている。そして彼はそれを不可能事として断念してしまったかも知れない、という構造である。ここに決定とは何かが問われる。決定(決心)と行為(実行)の結びつきの問題である。問題は彼のジグザグ思考が弁証しているか、どうかである。彼の目的(それは読み手側にとって判然としないが)を問うカズイヌチカは、問題の道徳的解決という意味では分析が終っているという彼の意識を生産したかも知れない。しかし実行したことはアリョーナ・イワーノヴナその人の殺害、すなわち流血、そして金品の強奪であり、それによって、抽象は具体的な殺人に転化する。ラスコーリニコフは後に事件後、リザヴェータの姿が意識に浮上することを、心の底なる念力のようなものに無意識

のうちに依拠して、避けさせたかのように見えた。同様のこと、つまり意識的
反論が意識に上程されることを忌避するために、その領海に船を近づけないよ
うな機能を果すところの装置が、彼の無意識的自己の中心において働いている
はずである。このような彼の一連の連動装置の連鎖の、一つの最も弱い環が、
たった一度、彼の前におぼろげな姿を現わしたことがある。それはマルメラード
フとの出会いの後、帰宅する途上の自問自答のなかに出てくる「作られた恐怖」
論の中の卑劣漢についての考察である。[I-2] けれども彼はそれをおのが頭
で考えながら、それを自分の思想の批判にまで発展させることはしなかったよ
うだ。(ここに言う意識するとは、自覚するとほぼ同義である)。

ここでは具体策、つまりアリョーナ・イワノヴナ殺害と彼女への強盗と、
それへ向けての彼のカズイスタカの欠落に注目しておきたい。これを他者の目
から見るとどうか。それは剃刀どころか、戦略と戦術を欠落させた奇怪なプロ
ジェクトであって、ラスコーリニコフが反論を見出すことのできなかったの
は、彼が、瞬時にして両極のあいだを転換するという無意識的な特技を駆使し
て、それを無意識のうちに見なかったからに過ぎない。

1-13 ドストエフスキーはいささか歯切れ悪く、最終的決定を実行する最後
の日が思いがけず訪れて、すべてを一挙に決定してしまった、と言う。小説
には、唯一の動因は、偶然(悪魔)であり、自己の外力であるかのように、
あえて読者に思わせようとする仕掛けがしてある。→(8)。仕掛人はもちろ
んどストエフスキーであるが、一方ラスコーリニコフは泳がされているだけでは
ない。彼一流の勤が働いて自からなる、無意識に近いポーカークフェースを決め
こむのである。それは他者に対してというよりは自己に向けてであり、すなわ
ちキャリア⁽⁸⁾流に言うなら自己欺瞞 самообман である。ラスコーリニコフ
の中には浮上しないように無意識的に抑えこまれている、次のような半意識の
断片があったと言わなければならない。「おれの行為はなんで奴らの目にはあ
あも醜悪なものに見えるんだろう？」と彼は心の中で呟いた。「つまり、それが
『悪事』という点でか？ だが『悪事』という言葉は何を意味しているんだろ

う?」〔エピローグ1〕

上に言う「彼が最後の決定に到達するまでの全過程」の中で、省略されたものとは、何か? 語り手の解説において、何が伏せられていると言うのか。省略されたこととは、思うに、ラスコーリニコフが内なるどこかで、彼のカズイスタカなるものに欠落する箇所があるぞ、という警告のパルスを受けとりつつあることを何らかのやりかたで知っていたが、これをまた何らかの方法で表層意識に上程せずに済まし了せた、彼独特の出来と機能、あるいは意識しない自己欺瞞についてではないか。結尾〔エピローグ2〕に至って、作者はほとんど解答に近いと思われるものを与える——「彼は……もしかしたら、自分自身の中にも、自分の信念の中にも、深い虚偽が潜んでいることをすでに予感していたのかも知れないということを、理解することはできなかった」。エピローグのこの一節は、ラスコーリニコフの犯行の動機を説明したものではない。それは、彼が自殺をせずに自首を選び、生きたいという欲望に捉われているという自分を、なお、いぶかっている時、作者ドストエフスキーからラスコーリニコフへの（そして読者への）示唆として、また励ましとして与えられた言葉である。しかし同時にそれは、動機について考えるときにそれを避けて通ることのできない、最高度に重要なインデックスを含んでいる——すなわち「自分自身の中の、自分の信念の中の、深い虚偽」である。この節は続く、「その予感こそが、彼の人生における未来の転機、彼の未来の復活、未来の新たな人生観の前触れとなり得たのである、ということ、彼はまだ理解しなかったのである」と。これは更生の敷居の前に立つラスコーリニコフの位置であり、読者がラスコーリニコフと別れる地点でもあるが、同時にドストエフスキーからの最も直接的な犯行動機の説明となっている。

1-14 以上最終印刷稿の第1部のテキストについて、犯行の動機にかかわるラスコーリニコフの思考と行動を俯瞰した。ここで第1部を対象として、この論の主題である動機論のために、既述のこととからませながら、若干の論点を取り出す試みをしておきたいが、それに先だって、主人公ラスコーリニコフが

第1部冒頭に登場して行動を開始する以前〔すなわち作品が発売する以前〕の時期の、ラスコーリニコフの、生活と老婆殺しとに直接関わりのある出来事とデータを、最終印刷稿全編〔のみ、すなわち草稿等を含まず〕から取り出して、これをクロノロジーとして置き並べて、掲げておきたい。出来事は、第1部での事態進行に、少なくともその表層に、姿を現わさないものも含んでいるが、すべてではないまでもほとんどが、犯行自体の完了にとって与件であり、なんらかの係わりにおいて前提である。時間は犯行日を現在としている。

1-15 7歳くらいの幼年時代、田舎の町にいたころ、父と散歩していてミコールカが馬を虐殺するのを目撃。[I-5]

田舎からペテルブルグへ出てきて、どこかからこの下宿（5階立ての屋根裏部屋）へ転居、以来3年住んでいる。[II-1]

2年半前「妹ドゥーニャは忍耐強い」と思った〔これはまた母の言葉〕。妹は最後に会ったとき20歳だった。[I-4]

昨年ドゥーニャはスヴィドリガイロフ邸に家庭教師として住み込み、100ルーブルを前借、うち60ルーブルをラスコーリニコフへ都合した。[I-3]

主婦の娘ナターリヤと婚約していたところ、1年前チフスで死ぬ。[II-1]（主婦 プラスコーヴィア・パーヴロブナは自称36歳、だが40歳を越えているらしい。）ラスコーリニコフは許嫁の死後、主婦から借用証（115ルーブル）を入れさせられた。[II-3]（ラスコーリニコフのドゥーニャへの話）ナターリヤは修道院へ入りたと言っていた奇妙な娘で、表情ゆたかな、病的な顔。ラスコーリニコフは象牙の板に水彩で描かれた彼女の小さな肖像面を持つ。「あのこと」もこの人とだけはいろいろ話しあった。この人の心に、あんなぶざまな結果に終わったことをいろいろ話して聞かせた。彼女は同意してくれなかった。君〔ドゥーニャ〕みたいだね。だから、ぼくは彼女〔ナターリヤ〕がこの世にいないことでホッとしている。大事なことは、いまからすべて新しくなる、すべてがらりと一変することだ。[VI-7]

昨年の冬ある学生からアリョーナ・イワーノヴナ（金貸し老婆）の住所を教

えられた。[I-6]

半年前大学を退学したとき、ある本に触発されて論文『犯罪について』を書いた。ラスコーリニコフは知らなかったが、それは2ヵ月前『月刊論壇』に載り、予審判事ポルフィーリーはこれを読んで「この男はこのままでは済まないぞ」と考えていた。後にポルフィーリーはラスコーリニコフに言う「煙、靄、だがその靄の中に、絃が響いている。あなたの論文は馬鹿げた、幻想的なものです。が何とも言えない誠実さがきらめいている。若々しい、妥協を知らぬ誇りがある。捨身の大胆さがある。陰鬱な論文でしたが、それがよい。」[VI-2]

家庭教師の口も失くし、4ヵ月も下宿の払いをためていた（警察で告げる）。[II-1] 4ヵ月前母から15ルーブル送金（年金120ルーブルのうち）。[I-3] 2-2-9 2ヵ月前ラスコーリニコフは、母に手紙で、ドゥーニャがスヴィドリガイロフのところで無礼な仕打ちを受けているという噂について説明を求める。母は即答を避けた。[I-3]

ひと半月前ドゥーニャは、スヴィドリガイロフとの関係を疑われて、マルファ・ペトローヴナによって大雨のなかを馬車で送りかえされ、母プリヘーリヤ・アレクサンドロヴナと暮らしている。[I-3] ひと月の間、町中がこの噂でもちきりだったが、後にマルファ・ペトローヴナはドゥーニャの潔白を知り、来訪してあやまり、町中に告げてまわる。[I-3]

ひと半月前アリョーナ・イワーノヴナから2ルーブルを借りた。彼女に嫌悪感を抱き、奇妙な考えが頭をついばむ。その足で立ち寄った料理屋で見知らぬ将校と学生の老婆評を立ち聞きして、考えの一致に驚く。[I-6]

この1ヵ月憂鬱といらだちの中で部屋に閉じこもっていた。[I-1]

空想に熱が入ったころ老婆のところまでの歩数を計った。730歩。[I-1]

それから1ヵ月、「あれ」に既定の計画のように慣れた。[I-1]

2週間前、斧を下げる輪っかを考案する。[I-6]

[作品出発]

1-16 こうして第1部には、ほとんど全部の人物が姿を現わし、まだ出て来ないのはポルフィーリーとその同僚たち、自から罪を被って自首して出るニコライ、ラズミーヒンの知人プシーモフ等の少数である。事件そのものについても、またラスコーリニコフの思想についても、後に思いがけない筋運びに移行するための伏線とか、あるいは推理小説に見られるような謎解きの仕掛かがあるということ、皆無である。人間そのものを更めて掘り起こすのにふさわしいような、外科手術室で手術される患者の姿にも似た、故意に隠された部分のない、そして事実ほとんど無一物の、青年の姿がそこにある。

1-17 動機の発生と展開にかかわる論点を、ここまでの考察の中から取り出して整理しておきたいが、それをするための下拵えとして、a. 犯行事実の確認（その発生、経過、結果）、b. 動機の定義の問題がある。まず、a. 犯行事実の確認については、確認の対象となる事実なるものは、ない。対象はすべて言語であり、文学作品であって、それゆえに、それ自体が、動機付け（ただし多層的構造と機能をもつ動機付け）を内包し、また審美的価値をもつことによって、説得を意図として含んでいる。その意味で自己完結的であるが、読む側の理解によって、犯行の発生と経過と結果は、言うまでもなく、異なるイメージを結晶させうる。作品上の犯行の記述は、上に要約した。b. 動機の定義は、常に顔を出す問題であって、それ自体が主題の構成部分であるが、ここでは、注(3).に述べたことに少し追加して準備の足しにしよう。

1-18 動機 [a moving reason] は、その意味内容を大別して、a. 動く理由と、b. 動かす理由に分けることができる。このうち、a. 動く理由から出発して、動機(1).は、人間のからだの肉体的、精神的な働きのように、意志によって制御しえない行為を生む（行なわせる）或るものを想定する。それは、ラスコーリニコフが意図したり自覚したりする以前に、彼において行為を既に開始している（あるいは彼においてそう思われる）場合とか、殺意の衝動や殺意の惰性、幻覚、半自覚的な無我夢中の状態、それと無自覚との往復等を指す。

次に、b. 動かす理由から、動機(2).および(3).を設定する。

動機(2).は、ラスコーリニコフの意志であり、彼が老婆を殺すという行為の何らかの理由をなす観念(意識)の群と階層である。それらは、論理、理論、理由、理解、主張、情緒、情念、愛情、感情、憎悪、殺意等々を、彼の内に形成して、意志→行動化のパルスを送ることだろう。動機(2).は、積極的と消極的、能動的と受動的とを問わず、彼において意志された、行為の原因としての、諸観念の複合の運動を想定している。

動機(3).として、動機(1).および(2).について考えたり、説明したりすることを想定する。これもまた、ふつう、動機と書いて、「動機は何か」という自他からの問いに対する自他への答弁である。動機(2).と(3).はいずれも意識、観念、理論、論理、文法、修辞であるが、両者の違いは、基本的には、(2).が行為前に形成されるものであるのに対して、(3).が行為後のものであることだ。こうして、動機(1).(2).(3).は行為の重層的決定、すなわち行為の動機の諸層を構成する原因、動員、理由である。

動機(3).は、以上のように、実行の瞬間を起点として実行の後に、ラスコーリニコフまたは他者が、動機(1).(2).について行なう理由づけと説明である。しかし、ここに言う実行とは、作品中ラスコーリニコフが「本当の実行」の前にも後にも夢の中で老婆を殺す場合を含めて、彼における架空の実行を除外するものではない。従ってまた、その架空の実行に対する理由づけや説明もまた「本当の実行」に対する理由づけや説明の上にも下にも累積されることだろう。これらの言葉は、ラスコーリニコフの行動に応じて活性化し、独自の作用を始める。

だが、以上の動機(1).(2).(3).は、不断に変化し続けつつ、相互に複雑な結合関係に立つから、個々の分離したり、抽出することは容易ではないし、実際上は不可能に近い。

1-19 こうして、ラスコーリニコフが実行する(斧を振り下す)に至るまでの動機の審級は、次のような、a.[動機(1).に関わる]と、b.[動機(2).(3).に関わる]の項目と、それぞれの類別項にまとめることができる。

1-20 a. 無意図的、自然的な審級。

(1). 二重人格——その起源、前歴は明らかではない。それは作者の設定である。二つの対立する性格が交互に現われ、一瞬のうちに人が変わったのかと思われたり、次の瞬間には前の人ではなかったりする。自己の分裂的であることについて、ラスコーリニコフがどう意識しているかは何とも言えないが、少なくとも分裂的であることの意味についてあまり注意していないだろう。ラスコーリニコフの分裂と自己欺瞞は無自覚的審級である。そして性格の転換は実際には衝動と同一の発作の過程のようである。少女の援助を巡査に依頼するくだりで、「その瞬間ラスコーリニコフはあたかも何物かが自分を刺したように感じた。一瞬の間にそれは彼の心をがらりと変えてしまった」 В эту минуту как будто что-то ужалило Раскольникова; в один миг его как будто перевернуло. [I-4]

(2). 衝動——例えば、彼が感じ、彼を何らかの方向性をもつ行動へ駆り立てるところの嫌悪は、初動的に、無意図的で自然的なものであったという想定から出発する。初動的にとは、アリョーナ・イワーノヴナと初めて会ったときに、予備知識なしに感じた感覚ということである。(この場合、それ以前の個性の形成は問題にしていないから、曖昧さは免かれぬ。要するにその時点における自己発生性である)。この嫌悪感の対象によって両方向に作用し、アリョーナ・イワーノヴナに対しては殺人へ向けてプラスの動機として、自分自身に対してはそれを抑止するマイナスの動機として働く。

1-21 b. 意識的な、非自然的な審級。

アイデア、思考、思想の面である。ラスコーリニコフ独特の、「剃刀のように研ぎすまされたカズイスタカ」、「新しい言葉」、「自分の言葉」は、すでに次のようなレベルでの審査を待っている——(1). 抽象世界であって現実への転化の戦略を持たない。また、より具体的な計画 мысль の場合にも、例えば、強盗した金品の利用方法、見返りの奉仕の計画等々は実現の段取りを伴わない。

(2). カズイスタカの方法、対象、範囲は彼独特であるだろう。人類の二つの

カテゴリー論からうかがい知る程度のことしか分らない。

(3). 対案(代案)と対置させて弁証するという方法をいわば無意識的に避けていく。しかし例えば、犯行への道の代案は、例えばラズミーヒンとの協力生活であるということは感じているはずである。それに気付く瞬間は、彼にとって自己の分裂と自己欺瞞に対面する可能性を含んだ場面である。

(4). 慣性の法則とでもいうべきものが働いている。彼の日常は、ドストエフスキーが言うところの弁証法、実際は無限の自問自答に満されているが、犯行そのものの実践は着々と準備されていく。このことは、彼を彼自身の計画に慣れさせていく。

(5). 決定(決心)。最終的決定について言及したように、決定と実行との関係を考えるとき、最終的決定とは諸決定の中でどのような位置にあるのか、微妙かつ移ろいやすい審級である。

(6). このほかに、選択の種類の問題がある。母の手紙のショックの余波で、ラスコーリニコフは、今すぐ何かをなさねばならない、さもなければ「人生を完全に拒否するんだ」という二者択一を自らに突き付ける。(2)のカズイスタカの審級と重なっているが、むしろここでは、果してこれが二者択一の対象となりうるかどうかの問題である。つまり、ラスコーリニコフの思考の経路に断絶と分裂が見られる。逆説的にそれは彼が「行動し、生き、愛する、一切の権利」を切望していることを示す。

(7). 臨界、圧縮、過飽和。精神状態であるから、計りようがないが、階梯の断絶と新しい資質への転換を用意する。

(8). 暗合、指示、天啓。これは偶然の受け取りかたであるとともに、他者の言葉の同化の問題である。この審級で問われるべきことはラスコーリニコフ自身の主体性である。

(9). 実践の審級。これはラスコーリニコフが偶然聞かされた将校と学生との仮想の老婆殺しの話の中に出てくる。「自分自身で婆さんを殺すか否か……君自身が決行するんじゃないければ、正義もくそもありゃしない」 а скажи ты мне:

убьешь ты сам старуху или нет? ... коль ты сам не решаешься, так нет тут никакой и справедливости! [I-6] 6-55 やるか、やらないかの意志ないし意欲のレベルであり、この学生は「もちろん否」と答え、ラスコーニコフはこれに答えずに [作品中ラスコーニコフが意志決定したとは書いてない]、実行した。

(10). 農村流出の都市生活者という歴史の審級。

1-22 ラスコーニコフの犯行の動機は、以上のような審級（これは全部というには程遠いだろう）において審査しうるような、文字通り無数の要件の集合体であり、運動体である。さきに文中、機械的人間の機械的側面という表現を使ったが、それは決して実際のロボットのそのようなメカニカルな資質の人間を想定したのではない。彼は夢想的な人間であり、そのことを人間の人間というのならば、彼は優れてそのような資質である。また他人への同情を行動にして表わすことを人間的というなら、その面で彼は傑出している。けれども彼において特色的なものである抽象的思考は、具体的なものと対話ということとを全く欠如している。異なる性格相互間の葛藤は見られず、融合と分離という弁証法はそこに成立しない。彼は抽象的思考の側面から人間的感性の側面へ、無媒介的に、途中のステップを全く必要とせず、転換するという不思議な装置を具えたところの、しかし、機械ならぬ、つくられた人間なのである。

〔注〕

- (8) カリャーキン・ユ『ラスコーニコフの自己欺瞞』Ю. Карякин “Самообман Раскольникова”, Москва, 1976 は、ドストエフスキーのカトコフ宛の手紙に見える創作意図と後の最終印刷稿におけるそれとの差異を次のように指摘している。()内は手紙から。

カトコフ宛の手紙

- (1). 高利貸しの老女を殺した「学生」の犯行の動機は、「人類へのヒューマンな義務」と彼自ら示すように、高等なものである。
- (2). 「最終的な破局」(自首)までの時間——約1ヵ月。
- (3). 「学生」の善意の認識と悔恨は、まさに同一のもの(ある同じ時点に合致する)。

動機論序説 (1).〔第二回〕(佐野)

- (4). 罪人は、まったくなんでもなく、かつてのアイデアを放棄する。「真理の法と人間の自然に当然な結果が現われた、そして反抗もなしに確信を殺した」。ただしこれは私の表現＝キャリアキン)
- (5). 贖罪は意識的な、そして決定的な結論とさえ思われた。(罪人は、自分のやったことをあがなうために、苦しみを受けることを自ら決めた。)
- (6). 小説は罪人の懺悔の形で企画された(第一稿草案による)。
- (7). 小説の分量(5～8印刷紙)
- (8). ドストエフスキーは「小説」を「1ヵ月」以内に仕上げるつもりだった。最終印刷稿

印刷された作品にわれわれは、これらの諸点に決定的な変更を見る。

- (1). ラスコリーニコフの犯罪のモチーフにナポレオン妄想が強烈に取り入れられ、またそれだけ強烈に彼の自己欺瞞が強められた。(2). 小説の行動の時間は、約2年で、その後、無限のかなたへ去っていく開かれたフィナル。(3). 認識、悔恨、贖罪はすでにはっきりと分離されていて、ラスコリーニコフは殺人後10日で認識し、1年半を経て悔恨する。(4). 信じられない頑固さをもってラスコリーニコフは自分の確信を擁護し、ほとんど小説の最後の行にいたるまで抵抗する。(5). 悔恨する罪人にとって、贖罪のすべての無量の難かしさは、まだ少しも分っていない。(6). 小説は作者の側から書かれた。(7). 小説の分量は約40印刷紙。(8). ドストエフスキーは1ヵ月どころかさらに15ヵ月これに取り組んだ。